

丹鶴叢書

草根集十一

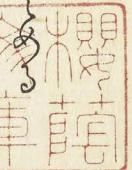


7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4



草根集第十一

亨德二年正月朔日試筆三首



冰
解
木
社
五日武田大膳大夫信賢家
立
春
野
顯
鶴

氷解あくわきあく川ももめのふせむ歩むほのうねの花のれい
木社のうすまことひやよせの富く教づるもめでまめもめ
天下ほらまき神するおもくもめでまめもめ
五日武田大膳大夫信賢家
立春このとひのひよとててもものまふをあはるやまと衣乃種
春野遊望くよまくよまのまちうむ柳引もよきうのじのう櫻花
顯通いよくよくよゆのまよもよゆに周のまよだう名ゆうも
鶴おもむすまの宿のあらみくわの鶴をえふかゆる

六月畠山修理大夫入道賀良家より讀みあそべ
浦帰雁 芦鳴する浦の改められたのやすらぎかなる
僅見恋 わかこくさむせゆぢくの幻よみを消り名前をのむ
神社 住むの神のみあがむはなよほくせよや松の木とのも

十日三宝院准后良賢御會始り

初春祝 松の木の御事とてよせよもあまよき事のま

十三日ある人の家來る

庭松久友 仁枝やひ野をまきわらをもほきとてすらやする
當坐早春霞 まのづるまつすまきる神はほしゆくまきのせをあめ
花似雲 はな枝のうらやまきのくわきくらる花なりのせ

三手松

尋契延 くようとぞくよく宿とまなめあく中よたどりてあら
名所浦 そほほま浦のすゝむちあはづの浦と延ちもんに
文安八月上十四日小室愿協モ入道淨元明崇モ云々

次沙汰あまくふ

松延齡友 まのともやくらむねりあるとくのあくとくへん

當坐

早春天 けくまむかくまぬ天氣すまくまのまくやくくま
花春友 ちむむかくまの枕ひまくねとくみひまくねとく
宿雲岳 ほほせらすまくね持くねやまくねじくまくねのま
嶺 松雲かる嶺とすのねとくまくねのまくねのまくねのま

十七日或所のまく

山朝霞 あさひのあさひの朝霞をめぐらすもものか
惜落花 まよあらわはうきの花の落すをせとぞめかぬらん
寄朝鷗 出る日のうちの鷗をもへるのまよふやくえひとも
田家鳥 あくめうほあす月もお清めお風る里の鳥のこゑ

十八日細川義久浦頼久家より

遐齡如松 老いゆく年ねむれ齡はなづくすよ同よまきよそもせん
當坐 夜 梅家春 さかづかの月の夜によねども見る梅の下にせ
祈 まつりかめまえかまくすすみゆきのめぐらす

十九日滝川右京義穂の家より

梅近香 雨のをとどけよがまくさうじよの梅の香

子根

餘寒雪 あさひ消るせうの日影よねどもちうても冰もまのらうせ
寄火恋 らうむれゆよ思ひの少ぬ出んよとすむれよもゆくはゆぬ
釣 漁 よざるのゆすきよと持のまふと月すがくも延きの釣計
池 亀 うのよよきくの池やあひ安きゆのゆくますすすもあひ
廿日草堂も因次

山春朝 朝あすもすまきぬと風のまゝくときあくまくも
初春水 當坐 水 うきよかうてゐる風に波のまゝくすやびの浦風も
冬 归 雁 雁くよやさくはやくとまよすかづまくまくまくの調
磯 浪 にじま 浪 うきよちよかうてゐる波の底くはまくのまくがくまくも

廿六日晴より寺、坊権サ伊納因寺月次
松影浮水 沈むの處のまゝ波ナシモのたゞみをこもレセ
當坐 晓立春 立春 そよそよとく、せりあすやの神であるや萬神ノム
苗代 代 ちの田の苗の垣代、うらうらあるは山のゆづ
閑居處 居處 そよそよとまわるの音、はぢてハ流つて西移
旅行友 友 そよそよとまわるの思ひをもよるばとの月を
廿七日修理ナミの家より、後あわづ
霞春衣 春衣 そよの衣、あまことせ、半もの着のうながたぬくも
澤董 董 まれつむほのひのひのまき一束ねハセテの毛衣
寄月恋 月恋 そよそよの月をひとよもじてせよひのま

霞春衣 春衣 そよの衣、あまことせ、半もの着のうながたぬくも
澤董 董 まれつむほのひのひのまき一束ねハセテの毛衣
寄月恋 月恋 そよそよの月をひとよもじてせよひのま

稿上雨 八橋やそのゆゑに、かずさ雨ぢくまくまくふれせ

二月二日同家の月次

正月令

每山有春 春 ひやまやまくらぬのまこと鶴よかなうすのゆき
當坐 松上霞 霞 おきせのまこと鶴よかなうすのゆき
名空秋夕 秋夕 さよまへ遅きもよひやいよまひあやの風の林のくも
絶文鳥 文鳥 とよきつる音のまのたまひ子えまへやまとくも
羈中眺望 眺望 あくまどすよひ旅宿のふれはぎるぬき旅宿をすらう店
正月本
四日右三氣佐の家より讀があづく
海上霞 大船のゆくふたても津があすくもたまひ人
貰 えりつむねくそときために向むくのみやづく

閑中燈 桂の木のまきより同もくじの歌をうりあはよと
六日細川右馬ひ入道を貞家とて讀みす小
柳靡風 ほりすく岸の柳の歌すもかなむめのまの川風
花下友 あやしむすむむめをぬ花ハ庭すくらむむらん
恋 鐘 あやしむのくのまづは鐘のこゑにむかひの精を
名死鶴 かゑむむかえの山葉ふせふしむくわが鶴を衣
七日正慶寮へキキと詠すあはり

牧春駒 約の毛のひもひもとひのひのまやうと荒け
恨身恋 ときのわ一契の説あかるとうきうなゆあはれ
湖眺望 るいよ入江のらむるきかきとのねまやうひらす

十一日三井寺佛地院住持も善の坊の月次
霞中聞鶯 ひのくに鳥の歌もほりすむやうく風をあはす
雪消松綠 ^{當坐} くわどもさの消つるくわどもくわく太くね松の夕風
河水流清 お城や苔の歌つてむかへりくわくの間の川なす
立春霞 あすきいとくわやあも近きよ春のうるく方のゆ
落葉 おもづ風のハ木のやめがくもあくよびのむけの歌
寫書恋 鳥の歌消りきよまむかくの細めくまくく
曉 生みよ一聲やかくよまむのまえむむの歌のくハ
十六日祇園阿弥陀院へみよく詠すあはりふ
田邊柳 かづのくのくの柳一くよめくよまむの歌のくハ

島歎冬、あしたの庭よりやがてよみがへしむるのを
寄苔庵、契のまゝやすばよおとおとせんかや人のがくある
社頭鶴、財ぐる鳥のへこむよやまとめやくらへある神也

廿日草の月次

曉尋花、暁のきよあらむとちるはるに月よりひん
花慰老、被ふまうたどまじくまくもひばくまぬちくひ斗ふ
寄花、惠たのめやかな枝の葉ふうつてもふまの夕風
當坐
夜、花くあはや秋月おのものとめくらしもあくう、
落花多きものかきくぬけくのまの道のをもるをせ
旅宿花、じゆくわきくねくのれのうも被の引のゆくのれを

田家花、時より一りの穂おのづをのあくいの小田乃がくも
廿一日細川たまえ支給元家の月次始

春松契久、當坐ばまくわくよやねとなくまんま手のほもせずとぞうれと
立春霞、け美まくもほそりとくらむのとくまくのむきの旭と
遲日、かくくせものとくもがくも日のほくよやくまふん
寄山、大美まくもほそりとくらむのとくまくの消る日と
曙、雲ゆるまくまくのとくらむの様やもむくのつらむほそりと
田家鳥、ほくよよむむむたかくはくよくも小田のかくも
廿二日梶井門跡准后一承年と半とありあくいふ物つ
三一堯、あはくすまのとくらむ

ほの門よ三生くまむハモムむ万代よをのやう風

サ五日或人は樂とくすみ

朝扇浦月
花あすまうせり月あすくせすみの花のまほ
人よかあるゆがくもかわすか月やうるん
家玉惠类ナシ
扇と烟とをぬひ度ふおまくやかの星とくほ
惠同あさるじ千の石よけくのがくらひの名をくも
雲类ナシあくに風よかくやかくくもくくは
サ七日好りも日宝上への坊とく謡タカヒすあら

霞小美あさあさくわくわくのうきるあやあやまの小衣

切夕

恵アハタシあすまく令のかめのハキアハと拂石アハと
えくち風やくらぬまくのやくのからとくほを

サ八日布刑类ナシ大浦教貞の家アハ

霞遠尊富坐

久の天は恵の橋アハとちよもかくのくのくのく
梅風アハタシあくち風アハタシ山東桜アハタシ本小もくのまのま風

被忘惠アハ

あす衣被アハタシ見ひろひまくの衣アハタシの風アハタシ

古寺夕鐘

初アハタシかくらすアハタシよのかくのくアハタシやうえん

サ九日修理アハタシの家の月次

行路花

もくの道アハタシおまくアハタシあくの橋アハタシつかまく
静對花アハタシ風アハタシもくの花アハタシはくアハタシをあんせてくまく

家花夢ら鴉せきのじつふまそあくまタニ交かる枕を
朝

當塗

花ゆのむをの持よしる日の秋萬みく詠もかすみう

色ものうる萬の衣みのちとや花のさきあくす

花以せもむる里の別とづくのめおよしむる

花雲あまくさとあがめがすりはなれを小説るひの

三月三日右三日尤草庵より始く後半よまき

サヨシカヤリ

遠山朝霞新あとのあひおぐふらかひくちへは満うと絶
忍立詒もあくせくかくやうきあんの浦うすきを
窓前竹月のとく音うきの先ともほえくすく行の下露

三月

六日日吉大宮彼岸既に七日義く百三詠

左列第十日坂本村生還能は下坊よよすみ

一

湖上霞赤なむくとあむむもくてもやまの風く風をも余
夕帰雁紗よりもまよひもくひもくひなめぬもひる等
穿書函ますとハねうきかくふせて寄るもとす文ふるま

山寺水やくうとまくはくゆをかくまく桂川の山の月影
彼坊よ見湖冰もあく号對鏡よし経冊を牛

二

まくすと向くとおれのやくせこくすくの月

土日隆宗法事一百三法樂

中止

初花月郭堂時雨
初逢春河

十二日あつゝ年三十日又三十日

在アツヤサ

春山雲
春田鳥
夜待
原上行人
社

まのすよ神ミコトはあはくがるか

廿日草庵の月次ア

残
惜春

厭

恋うきかきひは我まなもむかハモもやるさ

二月餘寒

さくさのきよつせ又やまく一むかわねのちくさ
當坐お坐寄硯恋
波のすづはの水ともも重よ石さへひよわくやまん
暁遠情ゆきりがくらむせんくわむくいのむくわくめくわく
サニ日ある所月次子

遊

絲まじ日新またくのまよふ里のまよアモ松くまゆ

春湊

田ほよせくまの松風うはれアモもくみうらきくあさ
舟もあもゆうもあくの湊舟延年のかまのほのやくは

野若菜

時をね生内の山田ハサクモコトムシの若らをも持

別

恋うきの波の音もがくくぬくみのあや草よかくうせ

里

竹せきひ筑やなみ景昇のあみの松のかげの里人

サ六日三井寺佛地院長善の坊の月次子

慰

花りよさんとくの月の秋うる様乃はせあくせハ

早巖

岩もひきほのうくはくもするおと海のほやたのまん

洲鶴

鶴もよどくくまくらんのまくらんのやまのねうえの鶴

夕春雨

もものきるあくまくかくいはくもくはのよくす

寄河恋

恋うきくまくもづくうり枕もくの恋のむか一川波

故郷春

うきくまくやか一の恋なんんあにゆくもとのと折

サ九日右まちまの家の月次子

暮春

やあくくまくまくもくまくもくもくまくもく

春恨もどかしさや秋悲あきさびかぎりの首くびの音おと
田家春たけんしゅんちへひの音おともくやつる因いんのあくめ涙なみだのいづく
三月さんげつあく伊いあへて淨きよれあく遠とおく一ひと
霞知春ゆきししゅんゆくすむらめのせひのうしがく
赤鐘あかのぼきははくせに被おふる音おとのなまく
岸頭きし詩舟しふねに思おもふじくわらやもくらんよせんまくのせ
卯月うづき七日修禊しゆけいを主家しゆけいの月次げつじよ

雲くも雀すずめさのれいむちのうのせひあく裏うらもき在いるの壁かべの連つらぬ
躡くつらはく聲こゑや蓮はすの花はなすくさくはくらんくらん
夫おとこのとなもい坐おのまくおはらんほ本ほんくらん宿しゆくはく

十二日同所月次

梅花浮水ばけふきもあこくかひく止とどかくと流ながすく小川おがわ
夕待ゆふまつくよきとあはせのいたばよよくわ絶ぜつめの松まつせ
海邊雲かいへんくもほのとよ寄より身みかく孫まごもきの帆ほおうひけつ

當坐とうざく江夏こうか月つき新浮しんうきもひやうきのとくがく頬ほにかくすのとく
市郭公いちごう達たつかくあくと聞きむもひきのとくの山さんはくら
寄枕恋よしんれんいはく抱いはくもくねくねやまくよの音おとの音おとともも
早はや苗なわうきのいの因いんすくおえうじるもあせまくら詠よのす
神祇じんきもくもくの詠よふきかく人のいのうむすきまくら詠よのす
池龜いけうすくふく波なみのうみのせきくよ日ひ詠よのあまももく詠よ

廿四日草庵の月次子

菖蒲
水邊蠻
恋
涼
高
顯
嶺
松
升六日平寺坊円秀月次子

曙水鷄
岡夏艸
妻
すみよしのまづりをすみよしのまづりをすみよしのまづり

塩屋烟
當坐
戸外水鷄
瞿麥露
寄默恋
原上行人
自昇車長尾但馬
あさく小豆浦の石
つるのうのまづりをすみよしのまづりをすみよしのまづり

林新樹
タネの木の新葉の鳥
ある
廿七日あるの月次子

菖蒲
水邊蠻
當坐
恋
涼
高
顯
嶺
松
升六日平寺坊円秀月次子

曙水鷄
岡夏艸
妻
すみよしのまづりをすみよしのまづりをすみよしのまづり

塩屋烟
當坐
戸外水鷄
瞿麥露
寄默恋
原上行人
自昇車長尾但馬
あさく小豆浦の石
つるのうのまづりをすみよしのまづりをすみよしのまづり

卯月 郭公 神のお月のまほすみかふゆうけつて写るる
逢夢恋 人もえりよゆありよくまきよめのまよえん
當坐
沙月涼 まさやややまやまよもふ夜なまく月の儀。
寄嶺恋 まよひらみとくらがまよひらにありよむまよひら
圉 梦 みえりあまみは園のうちなま。わづらはまのせ
サる大をめ月次。

郭公一聲 かきの月の月の一あよすまよゆくしゆく
雨中早苗 こなみぬ田の下もとの風かぜたふよみよあとそ
披書恨恋 ひじゆあよてすらまよとてば教くわらえまよこのもの語ごをがき
被忘恋 ひよ人ひとのすまきよあや来くわとななはまよあとそ

子根

當坐

一本葉

夏月短 たん多の波なみ打うても船ふねの下もとの月新
羈中待舟 きちうあよそどひもかくかくのまつてまつて川岸がしの舟
五月十一日三井寺照光坊と下もとへ達いたすよしと申まふ
山新樹 さんなみの木きよなる梅うめの下もとのまよのきとくいと
寄草恋 まよたぐあやよくじと詫むないがくがくせまうかの葬く
獨懷旧 ひとりせめうよくじと詫むないがくがくせまうかの葬く

十四日明宗寺を詣おであつま

雨中早苗 こなまなうよ田の杜もりよあよくちよもむむよもむく
名所鶴川 な浦うら川がのからくらうよはきの教くわらえよけよけの音おと
宮の薰物くわらぶつぬや出でる胡ごもふくらはまきのくゆの匂においをもくく

十五日大光明寺の月次

榜

射

照

舟

里

内

廿日草庵の月次

盧

橋

江

恨

當

里

旅

田

樹

宿

海

廿五日大膳大支家の月次

廿六日平等坊圓秀の月次

河 蛍 滲の浦海の水を飲むと月の下を走る
五月雨 さざれ水をかきくわきて又走る船の下を走る
寄道草 うしろの草を歩くとあらわすのをせき乃と書く
當坐 帰 鳥遙かに見ゆるからとおもひて昔のやあもまつたのを
氷 室に雪も散のまほとふ事とつも夏はやまへ
黄 葉いつとも秋やがまくとんとん金を吹下す事あり
赤 紅葉も秋も被りうる圍も出そ花のまほむ
屋 入ほのびやの門に吹きまく延びのせまく
サハ刑部院庸家のこゑ

庭蓬滋々すむは庭の蓬うねるは故のまじやまよりとす

蛍近飛 せとくらめのまくる故の夕飛は被るくとくとす
恨絶恋 うめふるはすれ一枝も昔よりまくとす葛の緋シキと拂り
當坐 終夜鶴舟 しのむる間も出やまく船の舟と一けつなく
寄心恋 すくよくがもどもも我とくよく恋とくよく
往事如夢 すくよく夢のむやうに物とくや夢と時のあくとく
六月四日右主なまの月次

舟路初花 さみきとくも野よづくもの岸よ枝よ枝よの川を
冰室風 三ヶ月の川風よみて水室をよみて本立よ立ちぬ本立
夜恨恋 月のかげの衣のうすよみのうすよみのうすよみのうす
故山猿叫 さむよみのうすよみのうすよみのうすよみのうす

十二日或ひの月次よ

鶴
夕
窓前蠻
遠村鶴
川當坐
頬
身
風
身
窓前蠻
室涼風
蚊
水室涼風
故鄉
十五日
首夏月
夏
寄山
水
水
サ日草

十四日明空の月次よ

蚊當坐
牛當坐
牛當坐
故鄉
十五日
十五日
首夏月
夏
寄山
水
水

遠山松
雲
牛當坐
故鄉
十五日
首夏月
夏
寄山
水
水

遠山
當坐
夏

松

雲

牛

故鄉

十五日

首夏月

夏

寄山

水

鶴
夕
窓前蠻
遠村鶴
川當坐
頬
身
風
身
窓前蠻
室涼風
蚊
水室涼風
故鄉
十五日
十五日
首夏月
夏
寄山
水
水
サ日草

朝

晚

幾

當坐

蟬 杜のもの雨とすゑのれせよまほりあひきやうのはぢ

涼 被をくらむ林かうか月の夜をくらむ風とす

浪 武士のもの候あらむる根ね根をもぬせとおれん
名 烟室 六月の東海浪 水をもぬくめぬきのうの旅間

夏 帯をまく緑をまくうきの衣のすくある乃もい

寄 夏別れ まわもまよまよの交刈ハ神の列のそーすのを

山 徒苦 さのうとすよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひ

サ一日すくふるく

行路夏衣 まむくのじ道の神せばあまくみのじゆくの多露

久祈恋 ま月のむかひまかひすくあませんえのほの遠漁

三三七

旅泊浪 くらむるは疊すにまくあま舟の宿すくまく

サ二日大膳大丈の家まく遠あみく

夏河鳥 え川よ鶴ハジくわむ鶴の教説かなき鶴のよき

寄菅原 人へう夏がまももひすハ神のまほくやまくのあ

夕也思 くもほ一昔よもやめぬよきのまよひとまのよ

サ七日右三あ伏の日次

夕立風 夕日とおもひて壁ようえのかまくの風を匂ふ

夏月涼 あたぬも衣せ涼 まく秋うらう小じよやうの月新

寄神祝 天よまへ神のまよまなとばけ林は海まよひま

空風花 さよわしも風のくどせもやうやうの梢の花をまざり

子鳥集書

夜盧橋 橋の風の匂ひよひとむづのまよる乃がうも
寄涙恋 くもくらゆの匂ひよひとむづのまよるも山川の匂
山家風 山涙河風とぞやよきむじかくわくやねあるえ

七月羽日綴冊の次稿吟

秋やくほの夜はあくめそとおふもあくね社のむ

七日修理天の家より七ナミ遠きのゆ小

七夕天早やくほくまおほくまの天は神世の天の川橋
駅路秋望 浦づくと望みかのちをとせすあからほくにあせ
寄滝恋 もやびきく船をさく瀧川の先とみとあせくら
寄柳恋 九まやまおよこす掛葉の浦をくらむよせん

山 家 まむきくまくほのいとがくまくほへとむらむらん

八日鴨部之基まくまくすみゆ

夜 虫 まくまくすみゆかくほくまくほの夜の波のぬま
寄秋地恋 秋すまくくわくまくかくほくまくちのくわくかくほく
田家秋望 牧のよもかたもせまくくの遙ひてむの民のちのむ

十日刑部大輔家より

浦秋夕 遠きの住ひのあむ村をくたまゆる浦な
モ祈詣 祈我神のむすととやよみととあひ人のおる社ハ
暮山松嵐 衣の我まほのうすやすととむねむす

十二日塙和右吉亮元為正原法樂とくあゆ

百々よす一やよ

立春　春もくおひたつのとくやけや風よまのまへす
花　咲も梢の月よもあむこ花のうせの春のよのま
草　さゆうをのあむきぬは波浪の波のまよがむを
夏　月ちうれも秋やかくすなまうる波よすく月の波ふ
落　葉よもよて落葉がくまうらみすもむれむお葉がむ
炭　竈かへりや被かくめん炭窯と燒火すもくとく
祈　恋神くわく妹くわくむちくとくまく川よまく
顯　恋新枕のまのまのまくふせくのまやくまく

船

路

よそのまなあらなだやな大舟よおうく波の繩のまは

十のほほほほほほほほほほほほほほほほ

初秋

風

あよみくくよれどもひとへ風うつよまく新月の床

秋

田

露　露あよみくくよれどもひとへ露よむきの露地あよみくく

雨

中

鶯　しゆのゆよむかくはるの色のまのふかくやさしみく

夕

初

鳴　えがくむ村國音へ初のなまくたづのうづト

聞

持

衣　こゑもくちむのからむのう金藻よむとくの衣うじ

俄

宴

恋　くわくくわくのみくわくのうかくくのうとかくくを

温

泉

みまみやゆゆく里ハク、ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

廿日草庵の月次

用達萩 こもじゆは庭より月影をあらう秋の夜をとむるのや
 江上月 老きのいわす聲をもひては木葉をさむる水の月影
 障山高 いとよき夜よもいのむしとくちゆもももつらぬる
當坐
 稲妻 みづつまきともども聲とくさのやうす音のいとよき
 見杉 いとよき見事ともども聲とくさの音のいとよき
 杉刈れりすまきともども聲とくさの音のいとよき
 人ハニヒ氣をもれのやあまくらむるのやうす
 木四日ニ井寺より遠きとへ大はすとせのやうす
 石山とまゐるはー船のやうすとせのやうす
 湖早秋 ひなまね月影のさーり舟もはるはる入鳥の秋を
 窓朝氣 あすはるかず華はるきの月の風もはるはる神の

旅宿 あすはるかず華はるきの月の風もはるはる神の

松猿

あうきぬねのゆふ人の聲をあうきぬのやのあい、
 あうきぬ指のさるのあうきぬのひよある月影

廿五日寺内より遠きとへ

初隠旅

鳴鶯 さうきゆうむしとけのうもさうきゆううけはるるれんのう
 玄葉 そととくはよがくはよがくはよがくはよがくはよがくはよ
 宿 あすはるかず華はるきの月の風もはるはる神の

廿七日あるの月影よ

早涼至

类ナシ

身涼 あらうけの涼ひまほりあらうけの涼ひまほり

草花露 えのひよめくひの衣あらうけの涼ひまほりの川流
 湖水船 えのひよめくひの船あらうけの涼ひまほりの川流

風知秋秋の風せん前のもふ立すつて四方のみほよ告言神さへ
稀^{當坐}鳶もくもくと元音と立ちまわらうすとタクモの和
海 村もくもくへやかくさんとまの延きあらまくとひの衣ゆ
サ九日平等坊円秀月次よ

露底種花^{草すくはくはくする露の底をすむるをぬ底の程}
田家聞鹿^{稻草まへ風あくまくかくらはせの丸石の持唐のあ}
見書増^{當坐}車^車もくづくのみま消^{くえく}くとくぬ坪のりゆ
叢祠月^{やまとくすくめり小舟ゆきくする坂}^{ちあ美}もくづく月
穿草^井宿^井にまのどき一のまつおむね^井おむね^井小舟^舟宿^井む
淨侶暮歸^{マツシタマタマのタマのつたぬけ}月^月もく一まる

八月二日小笠原美濃守教長家より始て譜ある

一牛ふ

荻告秋秋のあとはくの拂^{ふき}くせく^くの秋の氣を
遇不逢^{ゆふ}鳶^{いの}もくす我^わ狹^さもくすの氣^きハ秋風^{あきふ}く^く
夕松風^{ゆふ}夕^{ゆふ}ハ秋^{あき}の^の氣^き我^わ宿^{しゆ}したの^の也^は風^ふもあくまく^くの^のも

三日秋原^{アキハラ}庫助賢盛家よりかうかう一^{イチ}次^シ

新秋雨濱^{アキハラ}雨^{あめ}も^も落^{おち}と^とすも^もと^とハぬまうの波^{なみ}の村^{むら}の門^{もん}を
穿^{うが}秋^{あき}祈^{いの}ちまく^くひだの^のきと^とまく^くと^とまく^くと^とまく^くと^とまく^くと^とまく^くの^の村^{むら}の神^{かみ}
雪^{ゆき}浮^{うき}野^の水^{みず}め^めや^やも^もと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆと^とゆ^ゆの^のも^もと^とあくまく^くら

四日日下部宗頼^{ヒタチハタケル}より譜ある中^{ウチ}

春山霞 もちもよひのうなる處のまゝもあらたるもの相
嶺上月 潤りて月をとほして宿ある山をはぐ出る月影
難忍高美 あやめどんよすくすく出でてけりの西行
徑 茅多島のそよ角つてゆすれ共すまじし業せ間え

五日修理大支家の月次

古渡秋夕 神もよしの夜の音や天のまことの林の夕流
月前雁来 月のげよ小船ときよく波濤ふかくふか
馴不逢當墨 きよすがるいりの下にまよひのとくともお
秋田風 打せもよくのよしのよしのよしのよしのよ
後朝鳴 くさうき別鳴よすばく京樂あらぬ音の秋色

古寺鐘 滝のこゑもひのむとすよのまよ詠もよ詠の岸

六日草木もよくあくよすよすよすよ

出栖秋来 鳥えんねく小初の音の宿くわくもよく百千の毛
祈請高美 ねぎぬいの鳥もよくたまどよすす神の林させ
秋曙河 けぞよくあくる拂くわく拂くわく拂はせく川の水
九日大膳大支家高美 厳島法樂高美 はなはなす
海早秋 おきつせ雲ははきのうほの秋も林やなづす
船中月 島めぐらはすの月ふせんのあらむ舟引く
夜増恋 あよする床のまの子よよすむもよくの夜のよすむ

ナ二日大館兵庫頭教氏高美 一百三のや

梅

いづくも木をもぬ三日月の夜を寫す有す梅

まよふともあらむ月もあらずと簾の水庵ある林門流
寄弓矢うき名のたつゆをもひし聲もく山も草むれ酒の園も
眺望新月もきの夕やかのねのねのむすびにけり

十四日明崇寺月次

七月

初秋薄丸りやくの花落又ほよむもあはれも心參
鹿を遙おとす月小松風も廬のこゑづくし房のふりと
谷樵夫家をとせし猶大がたをせしもせ引もち不谷の家を
當坐
在明月是もみる我モ月のまゆはまくわ秋のさくすのま
寄鐘恋せまくの月の神よおちて持ふれす鐘の音の滝

島

鶴

はくよゆくよゆくよゆくよゆくよゆくよゆく

十五日草庵より

夜本

たと本

月前風

ちゆうふう風のえを林のまへる月のまへる

月前枕

まくらのまへる月のまへる月のまへる

月前枕石

いそまくらのまへる月のまへる月のまへる

寄月恋

まよまよ月のまへる月のまへる月のまへる

寄月懐

月のまへる月のまへる月のまへる月のまへる

十六日山名相模

ち教之家より讀おあらへ

落梅風

つみぢまみのき月の露もじ風の梅の花の夜

遠村雪

れいづのくよとみもももももももももももももももももももも

旧事恋そぞらの名ふやまのかるとる源せの小まのよの陰
関路タ雨雲をとくのむかさるやむとある山を

十七日大光明寺月次

原虫あまとわらもとまよのまよすぬよおれむと
秋夕風（たそくふう）な（たそくふう）ともも秋風のまよせよやひよる說
ト鳥（とり）回りぬ人のよよもともよよもよよよよも
當里山居早秋 庭のわ野のかげふつとて涼く夜の秋風
夢中製（せい）馬口の葉のまよえよ天のほ揚（ひき）とがくと御葉のねよじる
湖上眺望 沙の浜の遙かの舟（ふね）波うちるよみの波と風（あ）波
十日刑部太輔家（きゆうべ）

月前露 え方の月の桂やかづらえんえつるのまのへうる
寄月恋 神ゆきつゝ詠なま体らひよと月の歌（うた）とも
旅泊月 赤や風もねのまよもかやてのまよしはよ月うかく
當里新秋日 すあまもよもあらまの入り新秋よきほく季のとも
秋朝恋 すよやくまよもつる新ちよがはるよめ宿の村の
秋山家枕 わらぢと枕の歌の松風よき因のまよつ村のよきと

十九日明崇寺月次

夕 鳴鶯も新そつたすある宿とまよの鳥はよくゆゆ
曉天月 さかうて月はくやふねくの月の夜の歌のまよ
朝市 新の市もれ杜のむく鳥をうやいすとまよのまよ

當坐
叢

虫 驚鳴とよきかどもかくはまのものもか絶ゆのこゑ
家猿鳴 サー／＼もがくさくさと谷の猿でもうしぬ水の朝
旅泊夢 えもかくさうに旅の夢も牛もふれても船を駆らせん

廿日草庵の月次

松 虫 おもとふ更けの間もあおうかの日のねやや
廿日月 氏のもせくひをなすやなま廿日あ中の月の歌
野 今おまむき一月もかうむる村の秋風のうきの松虫
當坐 草花盛 おまのむの庭園のじゅうへおとめちくぬ唐詩も
卧待月 戸をひくじくねむる秋の月はし今どきすま仰ぐ宿
禱紅葉 浦より延喜のやまとお村もる歌のふまみの歌
當坐

廿二日佛地院供歌セニ尋坊

秋 浦より浦のとまりやあくねまくすくはる秋の露風
月前雁 ほきの翅のうそとまくまく月前雁のうるの一つ
秋 遠 ものへとすみまもれまくたまの秋のせまゆのす
故郷萩 す因のまん人旅一をのへとまくまくえの萩のまくまく
穿風恋 わくまむくまくまくとゆる風のくもあくは波
搞上苔 もののやまく門掲の緑とハ枝の苔とまくまく白浪

廿四日同所

山早秋 うきよもくおもくさくさくまくまく秋の初セ
穿木恋 まゆ中ハ秋のあまのすけよしよのいはくまくねのね

海路雲
伊豆の島とほよまく風の拂りけつ舟へ
廿五日晴れてお宿おこづくつても出でる
九月ある毛女俗弟純森逝去七月もとをもあき
よみはいにナ一日おさへよみやうなうとく人を
一ふすくなめし歌をきくこと

初秋衣
いつきぬらむ御もと衣のまきの秋の袖風
寄露思
くわらもむくの露と涼かみの袖の袖の袖には
泊
舟碇繩アヒタマカタマカタマカタマカタマカタ
ナニホ右三舟佐草庵の月見
一月見とぞくわく

十三夜月
ひのくま秋も果たま月の名より月あくわくほ
惜残月
ゆきまよかくまわむわむ中まの月はくまの月のねを
寄月
旅行
寄くもよかくまわむよくまわむ月のまの月のまの月
廿日草庵の月次

遠郷擣衣
とちやくわくぬりへたゆよこぬうう衣
紅葉移水
かくやくわくまのみあくわくせとくまくとくまく
旅船聞浪
當坐
霧
旅船聞浪
あくまはせとくわくせとくせとくわくとく
河
霧
旅船聞浪
あくまはせとくわくせとくせとくわくとく
寄井戸
川本
江
菅
河
旅船聞浪
あくまはせとくわくせとくせとくわくとく

サ一日日野中納言のまへては法樂と見ゆ
らむ

惜花
花をもあひなむとて汝は鳥の名つゝをのぞ
宋山月さのをふとおのへまへふ處あらむ月のさふ中
氷始結脣輕すのせやまくわやまくのせやまくのせ
弊待燕秋うけしむりかわむじまくわむじの衣
久祝君玉もめくまと万々きくかくもとわのまくせよ代
月出山新もふくのあよ高くもあよまの月のいつへし
小鶴狩雪もきき散つと秋のとよ小鳥もつけのわき人
穿菅ふさのとくわまびのりとくえふせんすか實もとくいぬ

曉原鹿
當塗
鹿をかゝるの鹿をの鹿と曰ふと御事あるもアリトアリ
片恋をほね人の心をあわせやうのかうの心にゆきて少
秋海村秋もむくの波をよきまたくとふきの延びあり
サ二日右もお伏草毛ふうとうもむく一
秋雨あさと材をなへばとてあいやふきがぬ山もある
秋草拂ふあはれとあはれや花うほのむくつむ
秋舟橋渡りのあらじとせんざおよ爐もせんざ治の炉
サ四日人来ふかくにまのを衆議判陳上
予よ勝負とゆくとゆくとゆく

霧籠紅葉シモヒのをとせかわのをあくせへつるじのあら

暮秋時雨
川村も列の原あそひむかへうきの船よ——くらゆ
寄秋別れ
詠ふふうつす葉あひだとみかと秋くまめん

廿九日右三氣化の家の月次

河紅葉
たぬ川もすむかへしののふよひまどすかゑい
暮秋霜
せ月や詠馬聲よ秋の村のみをあひむらん
夕遠望
残す一むらむすく夕望るのハ千島（ハルシマ）
當坐
初秋嵐
ある秋もくらみのめ風ひをかへ入園の二ヶ月
秋弊恋
たのめくちゆめのまよひに心うりん秋の戀（ハツノコト）
秋岡露
日影すくねよ秋露（ハルス）もむらて晝よ乱きるの村事

十月二日明宗寺月次

搞 霜 山川やくもく板たき橋（ハタケ）すくねくのよもとも
濱千鳥 天とくめせとあへ詠もうと宿すもくとくすもる山
古 寒 寺 波（ハシモロ）のいのかるが斗（ハシモロ）のくさのむくく住人（ムクジン）もか
草 闻 竹（ハシモロ）のむくの竹林のよきくさくさくちるのむ園
水 郷 いのくのよくわくむく風とすがくぬまもあら葉（ハシモロ）
八日三宝院准后山名右唐の替入道室主家より
の附書主税志年一月、詠すあはくよひをも
まく

十二日大光の月次

時雨神吉月の夜をりはるか遠くさきの神よ志く、
江残雁もまたと烟よなじやきのれど水の邊よるるさん
誓^{當坐}心^に延せ小舟を一そよたのもぬありおまゆ入あひのかひ
寒^月月龍の橋のまよひものじとくわくとくは月をかね
寄^う夢^ふあひてけくやある様のとくめく内かくわく
旅宿鐘ゆす小秋里を過^しよとも心^には遠くじまのがうそかくと
十五日^三月の夜をりはるか遠くあつづふ

芦葉霜^あらみくひ松^まくさのまふちくとまの衣^いせの中
祈^に逢^く心^にあひてくとくのひくわくや枝^えくの枝^えく

述懷^{おとこ}おとこみくをばくじくの浦^{うら}くまくの感^と
霜夜月もすすまのちくのとくむくの月とみく清風
島千鳥^島さしまくす水をくぬげよキ他^{ほか}もくあくとくするよく
山家松^山やかみくすの波の旅^{たび}の急^{いそ}ぐんとくすねをもす
霞^霞まゆのまゆなまく月^{つき}くわくとくすねをもす
忘^お忘^お心^{こころ}おほむきよもくむくのじとくわくの月影
松^ままくわくの道^{みち}くわくわくおまよ鏡^{かがみ}とくわくわくの月影

廿二日大光の月次

落葉深^おおもむきよもくおまよ鏡^{かがみ}のまくわくの月
石間冰^いいのくらむとくまみおもくさくよかくまくわくの月

夜過閑 返らるむ衣の間こゆるもあらやまとゆのうち

廿六日右京大丈の家より遠くあつて

時 雨 あまふとあらむゆるほきととく日暮ますせんく

寄竹亭 えくねりんといづも行のあむかへしむとある

古 寺 おきいじみの山林すまく寺もがもの庵あいね

十一月卯の朝すまめよく源氏物語遺を日暮く

年を一ふ箇かとくとくとく詠あわふとくとくとく

名取鳥 みなとりとくとくとくの歌をうかがひ世のあうと生む

獨述懷 くにのりのじとうるい生の歌をえひ、音の月影

七日右京やま家より南庄寝殿せくじつ

戸渡千鳥 あはきあはく夜うつはよむやうむのまかあくよ

山家夢覓 さんごくめぐめの翁おきなもあくはよくやまとものまかくらん

旅泊待月 はぢてくわくのまよかくると船よつりの浦うらむら

十四日大官常光院よりお令あらうふ

冬 鶴水 えりのみのねよかくまのうさぎ鶴とつや雪生

雪夕鐘 影をとけ宵もよのきよししあはく入木のうゆ
こゑ恨前世 恋うらぎのゆきとくとく延々の住里よけくせよ

十四日は景ちの月次

霜夜寒月 霜のえよとあはてくの月そくのそくねの下うけ
遠峯雪 菩提塔やまのきよまじくとくのどもうす柳やなぎハ

寄塩木惠 翻富坐 もがくはく一里の遙かの塔のむき恨と

網代うち門のまたのゆう白帆小舟あらうの布のきの代
祈

旅泊暁波枕をひのきの大船宿す車の月

十七日同所より雪庵法樂百々中下

立春あらひのむすめまほの沼のきよやをのえん

藤

次のとみゆきる夜の衣つゝ美 みとほぐるきの毛衣

夕

立海くさくさくともも葉とちくに付のあて冬のる
月

嶺

峰美

月をもとる歲の朧うきと月をぬさくみほの村の里人

野

雪あり林をい被りもとまほりよりまほりの雪の枕人

不逢恋我の延きかくも小垣もくぼる念をくらひの旅海

古寺鐘

山美

十九日右ふもと家より八幡法樂百々中下

霞春衣よし美 やくゆこの衣と玉くけすへうるやかにかきくふ

よ里

六月秋引すほも度するのきくあるもくのほ枝の山やう

初 冬をかすむの衣のうの旅きとがぬるみは年年

寄鳥夷の夷みよきつむきとよかくも大船もハ波のうを

樵 夫たすせせえやうとものおまくもあらゆる人

廿日草庵月次

河 氷をくわひ弱氣くうどむのぬひのよのの原すくふ

夕

雪 ひるがる歌の夕もすりゆくとへばすむかづくゆく
松 松のまよゆかての歌のおの相もまのとくのやまとく

岡

當坐 去鳴遙 がくのやまのきを遠どきのけとや昔よりあむまの全

見

月 やまとくの月をめむ月をめむ月をめむ月をめ

増

れ美 広 さよのひらひせのけとめを水あらわのまほがはた

古寺

松 なまのまよやまの松よがくぬやせの寺の庭のまつ風

サノ日あるのまゐのあつ

冬

曉月 ほくよくの月のまのむ夜ぬくわくそくの月の月

山

家霰 みの霰のまのくま九まのあづれ

海

邊雲 なまくとあるゆきまくらうのふおとくさあね雲のふ

廿五日平等坊円秀月次手

月似冰

未

薄暮雪 ほくもくの雪のまよ流ぬやすよおひまく川の月

野亭嵐

枕ともいふまの宿條やすすの嵐よまくのまよ

冬江蘆

當坐 ちよのうのまよ江蘆ちよのまよ江蘆

寒冬篠

筏さくわ舟さくわのまよ行のまよ

冬旅宿

そくとえ渡るた萬葉よた宿とまよとまよ

冬山家

里匂なまくかげくくる牛のまよかののまよのまよ

サ八日ち事こと一

狩場

欲暮 えむくのまよ風よまよやまよのまよのまよ

丹鶴書

雪中炉火圍の火も埋め合ひよかたまく冰よどする野の事
待不来恋たのむるね下おとて道うはむすゑの鳥あくと告ぐ

十二月二日恐れおき法師の事もよくやうめい

水 鳥を^る鷗^{アヒル}のよをともみの白いまつりをゆる波のま波
冬 夢少^{スル}衣あくまぬきのそよぎとへんじみであくぬ
古 寺御波^ミ浦り舟のくみを寺すのあく延ちの漁大
三日^ニ渾^{ハシメ}たま家雪^モ原は樂不^{ハシメ}中^ハ
神^ミ祇^シ 二のうち^ニ此たゆの神^ミ祇^シの事^ハ不^{ハシメ}先松風
夜^ハ 冬^ニゆう^リゆゑ^スの神^ミ祇^シの事^ハ不^{ハシメ}先松風^ハ近はく
野^ハ 冬^ニ涼^シせき松^ト風^ニのまよひ^ハまとひの夏のむか

詩格

鳥 草花杜^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
草^{ツバキ}花^{ツバキ}杜^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
杜^{ツバキ}花^{ツバキ}草^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
山^{ツバキ}家^{ツバキ}旅^{ツバキ}宿^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
旅^{ツバキ}宿^{ツバキ}山^{ツバキ}家^{ツバキ}旅^{ツバキ}宿^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
宿^{ツバキ}山^{ツバキ}旅^{ツバキ}宿^{ツバキ}山^{ツバキ}旅^{ツバキ}宿^{ツバキ}夏^ニ秋^ニ秋^ニ秋^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
述^{ツバキ}懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
述^{ツバキ}懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
述^{ツバキ}懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ
述^{ツバキ}懷^{ツバキ}冬^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ春^ニ

冬

雲毛津風あきけきの子とつたちむきめぬきの内

冬 木 入りやまのれのまほの種
忘士車もすむ枯葉下宿よりの風
土日大光明寺の月次小

月照納代 あく月の枝の新枝をしづ波より落つて
深山夕雪 トホトホたる夜のきづりをもはす
當坐 埋类 宿草述懷 古とどかず枯木地よりすすめ宿よニキ
圍爐火 すとまつまわらてせよめきもはくをもあ
歳暮鳥 少翁夜深のつらききぬはよとくとんよの下細
宿海述懷 きくのからみゆきとけすく沈みかくとも恨を

ナミ日平頼資さへ一讀すの申小

市中雪 まことにまちの雪市中あまきどきの里人
祈難逢恋 人いまやうのひ神もあくまく尋ねる
古寺鐘 よみ川思絶まくまやうの達のまくの入出のまく
十七日佛代院作歌セ集坊より月次小

雪中水鳥 沢より芦の下野よ床もあくさくよ野人よむむ
歳暮寒月 乙酉月の秋の雪むかがくやまおなまくせゆらん
深山松風 せすらぬあくねおひそむくはくのまくの風と
當坐 竹園雪 まのきよ昔の雪やくふん唐のまづくわく竹
恨 忘いのまくわくわくわくわくわくわくわくわく
樵 夫まくわくの道もよきあくへぬりもあき穿のく人

廿日草庵の月次

寒 爐 見
當坐
 霜夜月 日暮るまよしの月を物あつて是もあはれの心
 恨 悪 まも恨の行がはなれでちうぬはるかにむ
 山村煙細 這ひんとあゆの風もるの庵の爐を
 故 郷 はちも道へ極まるときすすめんすらか多

同三年正月詔勅試筆

手稿

立春七十日山風森むし老かうともにせやう
 雪中鳴きよ梅のもよかくさく梅やあく雪る乃
 祝 言ひよきよそよじよひよあく雪と能人よ歌
 年のよよよ持高せりよすくとくともいも出

あくよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
 逍家よよよよよよよよよよよよよよよよよよ
 りよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
 んよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

遠山霞 岩寺の御殿の山の山の山の山の山
 社頭松 住の村の山の山の山の山の山の山の山

二月のそーゑんねうたうむくとつるうてす
らへおひをまもるの月次なうへ おはよくつる
みやくねと正月うけほーはる

梅香染衣梅のまぐれのうめのまく風のまく風
當坐（シテシテ）
初春まこまくとばかのまくとまく風をまく（ゆめのむ）ゆめのむをまく
夕狹いきの狭い狭のまくとまく風をまく（ゆめのむ）ゆめのむをまく
恨居我社のほもうといた度のまくとまく風をまく（ゆめのむ）ゆめのむをまく
居たうとあまくと住むと人やあまくのまくの吉はま社
サニ日修理をまの家よりまくのまくとまくと
一ふうとくハ心めまくとまくとまく

山霞満くうきの夜をとほくの夜とのまくのまく
羈中恋旅のまくとまく風をまくとまく風をまく
故郷松是すくやまくのまくのまく風をまくとまく風
門柳春夏もく柳もくのまくのまく風をまくとまく風
山顯恋あまくはくとまくのまくのまく風をまくとまく風
眺望入海やまくはくとまくのまくのまく風をまくとまく風
廿七日修理をまの家の月次

松契多春はくまくはくとまくのまくのまく風をまくとまく風
當坐（シテシテ）
立春風天のまくとまくのまくのまく風をまくとまく風

老侍花 おとしはな とくともうるむねまきふをの食とのくじきとす
待空床 まつうつゆう そよがまくわせよとあけの衣となくほも
田家鳥 たんかとり ときを四年の里の村竹とむ風と鴿さとむく とある

廿八日草庵の月次

遠村柳 えんそくやなぎ のまよす煙を絶えずのやとへ
帰 き 帰ノ連 れん きのまよす夜の音とゆるとつまにのじまち
旅泊 りょぱく とくらまわす宿の友船とす。傍とよむる泊の引
野亭重 のじょうじゆ りくものゆくのとくやふよみぬまめ其のもの名とくふ
寄條 よじょう 條のゆくまくまくまく條のとくとくふ
山家曉雲 さんげきけいうん ほのきゆかとくわす月をとよむ宿の引へ

廿九日渭水平等坊因秀月次

山鶯告春 さんぎやくしん つぶすとすあわせむらわすの便ふとひくとく
當坐 霞春衣 かすみしんい 天門星を今のかへりまく一詩よきの衣うすらむ
折花 せつはな おがくひだりすむよやうて景がくとみのまむ
穿繪 せんゑ 繪写すも及くのむのがくはよくひのくの次のあくとも
行路市 こうろいち 人へはまよアモモトアヨム市とよむとく里の中石
三月四日右ニ開化の家より愚身病半立頃と
ノ聖廟法樂百多の中小

立春 たちしん わくよきの節よまやうぢにかくまぬ神のまゝま
夕見花 ゆくみはな えまみのをなる夜も枝すとむすめすも宿のま風

待郭公 旅立つゝしとつゝとくわせ
庭 狹狭のともなひの處よき處にすもあぬ野の林を

夕 露ちたゞくる霜よむらる夕の星のこゑとさん
寄雲恋 わづらひとかひのをあきらめうだらやなづむ

夜 兩終すかなむとよもとよもとあくよあくよと月の

立日修逕ちまの家外の月次

朧 脣
月 天つよ道さきの暮れ月のあよみをとす
花 あさりめやえむへのまろをあよみをとす
村 村看さくはるやの近ちの河岸當塗をあよみをとす
鶯 鶯う鶯のむのゆうきのをとむとむとととととととと

郭 公 ほくひとくえぬよの夜美一あとのほくひとくえの小枕

不逢月 つまか秋美とくよひやせまんあゆまするハ令あくを

孤 舟 きつまくよひ小舟延まくつまくよひをと

九日平頼 資さきくわく一讀あけ中なかて

曙 花 えとみ月ともくはむの匂ひよめじむのひほの

落花似雪 あもみ花のきわせまくふかくね雪のまくは雪
室花述 懐げひのまくはのをもみあくね雪ばくよねまくは

十六日修逕たまの家外月次

春山風 からくわ風のをかくすよひつとも景めそものいゆ

春野草 あくよふつともかくさて野あめのあも原もつるひよひ

春夜雨 花の色もうつづ月のすれよ光やらばのまゝのまゝ
當坐 江 花をもぎてむしゐる聲のこもひながすゆさく下浪

花挿頭 はなむくともいきとあん人のがまへのむのひやまくも
花催懷旧 おもてうたわめある物ひとむづハ浪夷をもくじ
花面影 みどりとあー花の白鳥も浮うるとのまのねのけ

ホ一日三井寺佛地院長築塔二月次

春色浮水 さるゆうなむく裏や入の浦のほむくもみの衣を
當坐 霞遠聳 はるまきの氣のあらうせりおよそみづづくも
心中恨恋 うすくぬくのうちのあも浦風をそきづくも
旅泊待風 あひやすやよもく風のかまとよづく海流を

サノリノシタニシタニシタニシタニシタニシタニシタニ

寺のあくまハ花か一感ふくらむ一内付の寺

尋

花ひもぞきくら様やかくもあひのをの毎日ハ

河

花自よす往よと没よよと聞よとよの行よん

山家花

よもよのあすへじのがとく様たちとあくま

花下忘帰

よもよのあすへじのいとあくまもく様やく告げ

花面影

よもよのあすへじのいとあくまもく様やく告げ

廿四日大徳大丈の家へと雪庵は絶樂万葉のゆ

立春風

よもよのあすへじのいとあくまもく風を初

丹鳥

叢書

山家花引締と喰へるもの枝ふきむらにのとさか葉
瀬鵜舟あくちを川せのう舟毎々ひそまく妹めぐらも
故郷露宿すくやまぬ村や昔の古いのちの林あざつみのキ木あづの薪
雪朝望あくすゝ氣きもきどすかせのゆかくみせらむあくす
寄山恋契けい一ハタのやのひのむふ旅たびも林はやおとづなき
松まつ為友植うまつた無むがくすらむ林はやあかづの松
サ五日人ひとまよふと月次つきさふ

若草綠縄縛とげもくちのまきやくもぬくまきやくをのうとく
當坐夜梅被あわせりをくすとくはくの多説たせよくふ掛か
共恩恋おんれんをくわせ被あわせの原はらの説せつくわくはくおのぬくむ

夜懷旧ききじゆさくらぶゆぶゆとれとも教おしてぬ鳴なぐいのうのうのうをゆ
サ六日刑殺大捕けいさつだいぼの家いえよく各月の月次つきさふ
藤花繞松縁とねまくまくとくきてはるのぞのゆうをゆくね本ほんを
當坐遠山霞影とおさんかげはくともあくも見みゆきのぞく西にの浦うらよからず
被あわせ忘わすれわすくよもくこくをくもくわくよもくわく
閑路鶴かにお坂さかの圓まんの神かみの鳥とりなまくせつみかくくあくくみぬぬのあお
サ七日好うい寺てらよく讀ようあくく

春月山さんをのよめ咲さくる早はやの新しんやと林はやもあく月つき
家秋露いえ露しづとわよ底そこる深ふかの夜よのぬく口くちひかくとおねる地ぢは
社頭注連しゃとうしゆれん神かみの四方よのうの青あおみ小こ八はまのまめきの林はやはあくくゆ

廿八日草庵の月次

残花 太陽はなづのものまちもとくにあはれては種類
雲雀 あるとくあるたうの村や里のまほのじるある
暮春 くまくらのちやもとくまほのさのあつまちやさくらのえ
當坐 竹簾外窓をめぐる萬へるあつあつておれるの下るあつ
暮 難忘恋 うきよひおきの渡のゆつはくをの月おはる伊
夕陽映島 沈まき浦せんぐわらの夕日さくわけつはる
毎日右三あ伏の月次

花隨風 岩をよみがへるかせの波打る花乃やすくせ
春田蛙 鳥をよむよくわあせあはりゆのかくわのいふむえ

古寺鐘 さうのくさうのくさうのいぢるは鐘よけり波のまち
當坐 暮春野 まよてた葉あらものふくよくまよかやくがもまく
暮春虫 まのふか蝶うちまつむせやまのむちの花園
春見虫 宿やまの裏のうちむせやまの宿向ふきもの
春故郷 うきよひのゆめ抱とくひあら種籠すくらる
四月朔日法事隆宗坊より人来経とぞく

首 夏 うよもよゆるゆる歩きぬくる日の風よ涼よ
鞆 离 あゆのむだくとくのあくやなやもくよせん
羈 旅 里すあくねのむのむかせを飯も住もあらむのを書
二日細川兵部大輔教え家とく語をかくふ

更衣あひ候はひとてあくまくがまくかの色衣
面影あらひまつれの人のあらがうつむふもと連
旅泊夢月とあよもぬかあよくからちのまえやもん

十日右うあたの家の月次よ

郭公あうしのをふきあうすくぬ詠うたすくまくまく
山田早苗植のむらのまなみの木おもふはうすめの林とすくわ
祈不逢恋もくねりのくねりのゆたのむくじのゆくじの縄
當坐蓮帶露れもくすまうくあすく白扇のむのとせくとくまくま
恨二类魚歎よくいにかの舟とあすくまくまくとくまくたゆく
水郷鶯二子の里三引せし城のうす枝よ歌のまくまくある

十三日平頼資さへ一謡うかゆよ

河郊花あらわいとくすくさのよるうら岸の郊を
二类待恋たのむすむすうれよあそごとゆくまくぬ月とくはく

旅宿通ひうまのたのも様なむてきめくすねば古むかし

十四日伊も入道淨元鳥りの明崇も月次よ

竹不改色三子の里すくとくむ行のまみを湖よ橋よ草よ

更衣當坐あひ候はひとてあくまくがまくかの色衣
兼厭曉二子の里あよくあよくあよくあよくあよくあよくあよく

旅人渡橋橋のりふえいしのまと被ふはくわくまく人
サ日草庵の月次よ

署郭公

二本美

河夏月活ま月影する川をとめくすすする夜の水

憑詞店

二本美

せかくいひをきむかたのもじとせのあらう

夏 星

一本美

月なみひのよしのくの入ぬるのやく

穿雨衣

二本美

うすあさへゆゑのあくろがの匂い斗ハ

蟻巖

二本美

わのまきの石のあくろがの匂い

サ一日人へみだら

早 苗

二本美

くわいたねのよしのくに

旅 雜

二本美

さむくのふくに

樹 支

二本美

いのくまのゆのね

松田上

新 遠

二本美

いのくまのゆのあよはす

三子

釣 漁

二本美

延びのゆよつむのゆうか

五月の月の次

菖 蒲

二本美

あさくさく九月のすすむね

瀬鶴川

二本美

まきまきのすすむね

人傳恨

二本美

あかせのくわい

野 鳥

二本美

もくのくわいのすすむね

杜水鷄 はるをとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよも
月 秋の月をとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよも
樵夫帰 あめよまきもとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよも

六日草庵よりよみかへるに

池中蓮 ちむしもいと種うん風うん雨うん池の蓮うんのと
穿煙函 そくえんかくの清う一烟もさうへあそびてみて
田家鳥 指うしゆをほせうや田のすりめよなじぬ林のむら

十四日明月ちの月次よ

簷菖蒲 五月雨ふ我と称うひや菖蒲と桂ぬちやの野も種
雲間郭公 くもまとの風くもの時鳥たゞや名すのと称のむき

三七

夜増雨 ひづくよみの雨の増ふくるのよもねあさの夜くさ
當坐 初春風 とまくよまくまく風やかの川よ射よまくら
薄似袖 たすくよまくまくかの袖やかよ袖わいすん
穿木魚 うのまくふ埋木あつて名魚の水あるまくぬ魚よ
曙 雲 くろのえひまくわうひうとうむけうるきのうすよ
サ日草庵も月次よ

螢火透簾 ひづくよくことのあすがまくよく量まよくくよくの間
行路夏草 神うくよく歌の夏まくいと日射ぬきぬくよくの歌
恨鳥別恋 うかぐのほむもアリふれのほむらに仕よまくよ
當坐 鶴川螢 ひづくよく草も螢大くあすく船の舟がよくあ

應達

支支山うらわすまうさ、十萬よ絶えあらすじく君やほん

サ一る平寺坊田秀月次を猪百よせふ

船中青鳥老の坂一おとこめのいはやあつまひのゆの舟人

逢後増應

足川もも連唐の船へと舟を湖よかへりてゆる

嶺林猿叫

空空く聲のまきまく西風く冬のやまとさへる

廿九日予う遠傷の時立野までとく詠神は樂の

百々と山度や沙汰も一ふ

立

春を風とちよみ。山房少豆もせんとあくらん

折

花梅をわくがくやくも老ぬくとあらわし

冰

室よもやまの花の半室アと思ひの夜の風かたむ

待月

秋ももよねねがまくとくの舟もよねねやあん

夕霞

いのなほのやのやの舟もよねねやあん

寄浦

よもよもとせんとくとくよひかの浦

神祇

ももと神の神へあれとく人の傍るよもよかな

六月四日修理方までの月次

夕蚊遣火

煙あをきよもよのうのうのうのうのうのうのうのう

名

冰室少豆もよねがくとほのうけくもよねがくとほ

窓前代風

よその風よの窓よの竹よのふうけくもよねがくとほ

對

橋向昔雨もよねもよねよのうとよねよのうのうのう

瀨鷦川

あらうのうのうの魚もよねよのうかくよのうのう

遠村煙

竹をハシタるのをあん煙すまのレキ

五月右京を家の月次よ

田家早苗田子の花もよすあとつむかうてあぬはくおとすや
寄夢心口ひめのまのうを移がくとほの川ハナのまつて
閑中燈かくとま園ひ居よおまくわすらすよの灯
十三日閑在すと長尾但馬ち空き京万葉のう乃
鷺と和室あつてどのひとくを一はおこよかづけは
モトホ

和室の浦の松のまゆはほきよ松のまゆのほ
よアハヤシの坂のまゆはすやまんわく

十日山草の月次よ

夕林岩

立入りぬタミナムたの色もすくふくくら
蝉にささのあすかくほやすりまみれとくと
松にさへまことくまくほのまくほおやくねく
夜郭公

賞坐

は鳥のやまくもくやくの月よるらじ
初恋やすくやうくおもあとの因のゆうのまよ出
滿鶯飛むるのすじとすよむるのゆきあつあつのも
サのまの月次よ

夕顔一枚のをとむる夕顔のかくの月乃と詠を扇小
河夏秋

丹雀叢書

夜

鶴種毛よどむハ御くのみおひとおひのねの鶴のうち

菖

蒲宿魚のあやめ匂いもやうう風も静かうなま

葦似露

すうそくはなみをくみうらのあそびの浦のくわがゆ

羈中

じゆう又延のすうらのよすみ浦のくわがゆ

海邊松

松のうら風がくくめくのすうるく月假に

サ一日假す入道淨元の家より遠すあつて

郭

公一もどきもあつて小舟のくわうほへりん

尋在鷺

小舟のうづかくやくもあひきくめうせん人

故鄉

夜雨もとそくせきかくさくくめうせんのあ

サ二日或所のを今

晚風如秋
子な月の夕秋りも秋ぐくもかくも秋の夕秋
河邊夏枝
夏枝の川とすすむなむに憐よまとひも跡す
不憑侍鶯
社びやもせうるのえも枝の夕をねうのせ

サクの平等坊因秀月次

閨
扇 まよあひがまくいよがひの扇の重きウタ風
山納涼 太守のきかく涼苦蓮もみよとる涼の新風
晝 畫 鳥 おとれづくもあらわと口のむちに日の影
採早苗 あひの内もか一田あひがなつてすすめうきくとや遅
朝納涼 衣またれもあらわの庭にうる夜とおもひのせ
穿山鳴 姉秀のゆく衣のまことぬや春のまのまのま

タ 雨被ひもさうする昔の人からとて是のもの

廿九日大猿をまわる邊に小

岡新樹 あらもの島のやうのむすめにすじはるす
晩夏蝉 色とまことにひがみにかすめどきよるをまつたる
笠侍 ^{ナミテ} 多きどよほのとすゑをひらひしれ 痘の癆生の風
社頭松 きどくへこむよかほどの所のいわゆる松の

七月三日便題大丈の家の月次よ

朝 桂 紫や菊の里に引ひ、庵の詠する夜も秋も事
タ 大つあふ村の父のひじりをまつめへとあむせと
夜 鷺 けづりへうづりむちひきはひとよすかまの月

^{當座} 外山麻 村も川も山も木もいきいきのやへるやまく指席のあつ

暮 秋

ち月のあらそぎのねはるのやまくすまくおひや清か
^{表ナレ} エ サクナのれのかまく静なんやおなづし宿の秋風さく

窓 燈 やすみ雨をひきつける耳吹かなむよける靜かな
七夕のり回家より一七十九日中少

七夕鳥

^{表ナレ} 鶲の音をと鳴つ太川早うせよ渡るれづせ

夜 衣 あはきやうひのまよすあづうめくよとれよ
擣 衣 あはきのまよすあづうめくよとれよとれよ
穿 蟹 あはきよとれよかよすのまよとれよとれよ
老述懷 なづくよとれよとれよとれよとれよとれよとれよとれよと

ナラの壇川周辺ち親友人丸の姿のどうぞくと
はうまく

ますお詫びの極くほのねやまうる柳のやまを
ナラの修理をまのす息ハ家事小児家老鶴丸がてら
もじりせまつまつめうら

初

秋まきかねうのめい秋立風を始まく

恨

恋ちりふ恨れにかげ下葉きつゝ高めえつせ

海

路雲あまた又舟波の雨ふかやせん浦うのむきやまの一村

木日草庵月次よ

袖

露白鳥の歌々の聲よ遠隔ぬ身ハタゞのほの秋モ

手稿

枕蚕こののまき園の花よモリハ花をまく蝶のあよばれ
秋恋れ秋かくそけうとあるかくすとめ夕も風むかくも愁ふ
野夕鹿さとうの里あかたがけしゆくすまうと夕かくまのまよす
不逢鳥絶はるもとづくくもあらうとせよと舟よ向る風モヤヒキ
遠村水おとのむきよせよせよせよの里のゆかなまのゆのゆ
秋述懷もうせよせよもあよひとよよみの秋みよとよみよ
サクタムのゆのゆ

江亭秋を薄すまづ入にの高の松風よ秋のよよよよよよよよよ
曉聞度ゆくよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
田家雨秋の雨のかよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

サニ日刑部の捕を多す

草 花の名の百字をうなづかせてもよしと教
 見 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 恵 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 秋 売 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 當 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 夏 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 秋 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 穀 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 教 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 人 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 祈 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 教 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 人 月をうなづかんとひきくすりとせんの月
 祈 月をうなづかんとひきくすりとせんの月

翫 夕鷺 遠く見ての月やけぞりの月やまどりの月
 月 月やあさくら夜やどりの月やまどりの月やまどりの月

帰農書 うみの浦をもつてもともとこの名のことを
 名所鶴 つの浦をもつてもともとこの名のことを
 サ六日ある所を今小

秋夕風 うみの浦をもつてもともとこの名のことを
 田上霧 田上霧をもつてもともとこの名のことを
 名所松 そと松をもつてもともとこの名のことを
 サ八日富樺次郎成春の家をもつてもともとこの名のことを
 ふ歌とさくても

立秋歌 とく原やまくい風をまく風のうめ秋をもともとこの名のことを
 暮天月 みほのまつ月のうめ月をもともとこの名のことを

初見恋うるをめぐのきとすむまもれからむ枝の神小美
嶺樹風人はうて祭の松林立たへれあく一木門の名
旅泊大船のものせおうせえれと風流あからず也

八月七日ある秋のすい会

鳴過湊がほせをくわへり舟とがきと候延の衣の被のうと
月前鐘えのよのさとはまく天つゝ月つきを音に響ひびのあらふ
白地しらじ恋こいひの波なみの匂においほるといのつすれかくる正氣まさけ

サさ右三閑作うみづかさの家いえを語かたうちうい

草花露くさはなにねの煙えんをあらむものからまきの新風しんふう
穿月尋うるわしないのうもりてかとよさとよさと及およる月の歌うたをまも

手稿

澤鶴くわとすとすと音おとにあらむい葉はのすへよえのすへ

サハ日草花月次延川ひのくわほひこう

初雁連雲しゆうちくのほのとぬとぬあくひるはやのすへ
秋夕傷心あきやくさんやくさん

當

秋夕傷心あきやくさん

月次延川ひのくわほひこう

根ね

月教げき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき

馬め

暮天月月をもとめのタ鳥とりおもてねくどくしてきくぬ
怨おもてれくおもてれくおもてれくおもてれくおもてれくおもてれくおもてれくおもてれくおも

宿戸恋こど恋ことやくとやくとよもよもよもよもよもよも

九月こ月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき月つき

萬 風うつあまねかうのがまへすみのれの秋風
宵月初憲りまやくのきみとく夜もひそゑん乃月
晚 鐘をとまくはまゆるまくにまくはく入まくの秋
野行幸とほしきなまくまくまくはれよもくよ鳥の命と
ナリシテはまくおもくすふ

山岸菊 花のまづうつすうも根とまくまく山岸の菊の一本
寄虎岳 もと新しく名づけられて虎岳の邊に
谷樵夫 せくてあさ谷の水おちまるとててはまくはまく人
十六の曳もく毎秋の秋の底おこまくの草木を

かののまくはまくはまくはまくはまく

萬 風 桂風よほくのまくはまくはまくはまくはまくはまく
曉秋霜 口すまきの月も老葉のすゑよまくとくまく秋霜
家名^{當坐}憲 とくのまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
田家見月 月のまくは竹のかくの役をもとむらむらの秋風
垣 椋 えもまくがまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
鳥 あまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
鶴 鶴 そくゆくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

八月のまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
たまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
たまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく
たまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

利永來也と一讀もあへふ

初 冬 まきまきのひのね一本稀あるきとてあつた

雪冬用鐘 さめうる入ませたがくとてあつた

別 志よりとさんあらどもめざしてたるのをへ原

草庵雨 おの雨をむづくは庵かとてよ野すとハナシ

廿日草庵も月次よ

落 葉 みまくらの葉の氣もうれしとやくやくもものきくま

残 鴈 みのまくらの氣もむかむむむかのまの月とすての鳥

田 家 みの田よしう庵かのまの月とすての鳥もむかの風

冬 晓雲 岩ちゆるかべと列はく、横やくちゆるぬ

夕深雪 あきくらしうるもむも残暑のするのをの庭のあね

変 烏 うつまう人のの水のもやくするせハ風も草むへ

山家松 里へあきく風のかへす宿もしげゆるのくの老松

鷺 みねの身の中のねむとよのうへ寝のむく

廿三日、或所よりと影をよこす

濱千鳥 さく沙と波打の海の邊せふわせを清くいふる

深夜霰 かくあめたぬもむりそくとてくにとてくにとてくに

空雲心 もぐなまくのやめをかくふぬとむだる宿の心と

往事夢 ちゆうのやううえぬとまくとくとものゆゑん

サリの夏至利來西度才へあく一達す。シテ
夕蛙あふ。されど此をのなる夕はよ小雨の時とおもひれゆく
月前來。さういひ袖下の糸とほめや月の角のまわり里人
馴不逢應。ともしのうきの経ハシナヒ。是れのちよむすび
鐘を何方。せなもハ昔とくそとくあらまつかるせの達等は
暮林鶯宿。さワ一や羽ニのむよのをさにまき。其のうちのまき
十一月朔日細川上総今氏之がよく達をあつてに
影とおもひせはる。

氷初結。多川の汀とぬる冰のやまとやもする。是
宵月夜。是れ人のうみかみとあらめよくと四月あ般

古渡雲。流すくをとくの流の枕カタマとやかなを延す。大
二日朝天。下静なる山名右兵衛入と宗全もの
よとやうはる。四日と半。よだつも金をとひ。湯居乃
沙はあとせ。静をかくはま。くわくわり。あは
よとや一郎店士。よそのふの名達をか列教。其
道の間。是れをとおもひ。一はよく。はる。

湯をうこ。十之せのまつきて。六西のじゆを
かへ

墨をもと。月のくせよ。代をすはよ。其へ景。お

我よりも先手より人があしとすくものとくそをぬる

かき

せうへりよみすけの秋の又せよなうふ先あみは

氏終入道宗仰西度アヘ

友もる同一教のほと門ニセキムキムキん契

きせと柳とほり

く、三経三住家の塔川ハ百草すだるアドこん
十八日赤右三關伏木原すすむ一渡かき小
霜夜月向むせと秋風よまく風六時すまのものと
室漂鳥後くよ水のうよまむのよまくふみをぬ英とまづ

さる

海路暮雲くも流のちよもがくまくくまく改の入江よしゆの船へ

サリヨモ月次よ

朝見水鳥ハ千唐すむと入江ハ甲の名のきくらのまのとくめお葉
雪中遠情きくらぐ島にやくもくとくのまのとくの鳥カ一とく
逢中絶鳥人うせてもすまくあつひよびハ終る歌どくうじ
當坐
千鳥もよの延うの夜よの浦あるじく神よおとて
穿風函引うれのちよひよみにまはよかよとくの風もひか
麓紫夕日さくすまくとくの浦のばすかうへかくもくとく
穿船難あく海の汽くねくねくねくの命とれやくもく

河寒月 沢の月の下よすまのおの羽風は野をもかる
竹間霰 杖もんづらむむ竹のふきの枝やくをまなうと
恩逢恋 なみむりのまごむまどもまく月をもあらぬいぬ
當坐 松間雪 せはまく柏木もむけ松の枝をもほむかせうのハ
穿柏恋 ちへちきたぬけうのまくとあるかねりきかまう秋
樵 夫 級のよかまくとくしんくまくとくしんくまく
十一月五日あくあるく歌とさくくまく
千 鳥 はるまき川みちからかくまく店をあく歌とまく
遠山初雪 えまのまよまく又く又くやまくの歌のまく川をも
祈 福を加麻やひづれとひきめおこなふと夜じせ

冬山家 しらは烟すまぬ翁のアとゆく歌のあまく

十日あくかく謡をあくく

寒閏月 そのやももまくまくかく閏よりの月の下よすま
店 泣 うきなきくまくお床の歌の歌の歌の歌の歌の歌
不盡山 えまのまよおまくあかせのまよりせーのまより
ホタヨク方もの月次よ

炉 火 ちまたくともおもわつやふゆる所をもかくを
歳暮夢 あやうにしきむらうの夢よくて夢の夢よくて
濱 沙 せのまよおまくこの山とつづかずの紅葉の夢の
當坐 冬夜山 ほゆへとめくらう所の夢をもかくを

富江處 旅館と云ひやをもものとも御ひのせの神ぬらひ
神社もあつて御ひの神がすとまつて神やうら
廿二日あもふまよ

松山雪 よしむね作のとくへまういきる處の内を
寄岡處 あはれに おもむくおもむく思ひの内やと
旅泊夢 えりとゆうとゆうのまにへばのかるやくと枕なるらん
ホセ日右三隅たわみとくへ遠くかく一

夕 霜漬けにかくもやまやまち時とぞのやまかくと松風
寄月夜 いづれとくにちゆめを枕よとくと月とよよとも
述 懐きよきつのとく船とまくとまくの月よとく

